

2年後の1998年には完成間もないキタラ大ホールで「上元芳男メモリアルコンサート」を開催。演奏はコールアイリス、札幌国際大合唱団・OG会、静麗会、嶺の会、北洋銀行合唱団、メールクワイアと有志で、それぞれ上元先生との深い関わりがあった団体と個人でした。合同合唱では上元芳男・遠田京市作曲「混声合唱とオルガンによるレクイエム」が、指揮・長田守弘、独唱・長内勲、オルガン・瀬尾弥生子の各氏のもとに、総員195名によって厳かに演奏がなされました。1999年の総会では、我が団に長く貢献あった指揮者・長田守弘氏が健康上の理由で休団することを了承し、指揮者は団員の庄司努、田口好之、高岡重秋（翌年に転勤のため休団）の3氏に託されることになりました。

翌2000年に創立25周年記念第15回演奏会が札幌サンプラザホールで開催されましたが、この演奏会と「かでの2・7」で開催した16回演奏会、ちえりあホールでの第17回演奏会では、庄司努・新井聡両氏の団員指揮者の他に、岡村俊二氏に客演指揮をして頂きました。この実績を踏まえて、2003年7月、役員会は岡村氏に常任指揮者への就任を強く要請しました。ここを起点として、また新たな常任指揮者を得たメールクワイアは、航海に赴くことになったのです。加えてピアニストも、これまで創団当時から1993年ころまでを支えて下さった星野幸江さんに替わって、1992年頃から現在まで秋元恵理子さんに支えてもらっていますが、新たに2003年からは森谷直美さんも加わって下さり、我が団はピアニスト2名を擁する贅沢な合唱団になりました。

2005年は創立30周年。札幌サンプラザで第18回30周年記念演奏会を開催し記念事業として、「札幌メールクワイア30年史」の編纂も行われました。

その後の10年間。8回の演奏会が開催され、岡村俊二・常任指揮者を中心として、団員指揮者の高岡、新井の両氏の注力で演奏活動も順調に進捗してきています。これまでの常任指揮者の指導では、日本語の意味を大切に表現することを貫かれ、延いては歌詞の重みを演奏の中から湧出させるべくそれに相応しい歌い方を我々に求め続けています。休符も単に「休み」ではなく歌う意識を込めることなど、いろいろな例を引いての分かりやすい指導に、団員からはすこぶる好評を得ています。また、かつて試みた合唱コンクール参加については、常任指揮者をお願いするときに団の役員の方から挑戦は考えない旨を伝えたと聞いています。一般論ですが、合唱愛好者にもコンクール至上主義の人とそれを採らない人がいますが、その相克は決着をみません。その意味では、当初から意向をお伝えしたこともよかったのではないかと思います。団員の確保については役員の奮励が功を奏して、2~3年前から50名に届かんばかりになりました。思うに、合唱の誘いは退職後の身に、寝た子を起こす効果があったと思います。

10年前に、鈴木徹氏が、「岡村先生を指揮者として迎えた今、初心を忘れずレベルの高い演奏を目指しながら、楽しく歌い続けたいものだと願っている今日この頃である。」（「札幌メール創立30周年に思う」）と認めた願いは裏切られることなく実現して、平均年齢73.3歳ながら、次の50周年への助走に入ろうとしています。

